東九州支部報

第 55 号

社団法人　日本山岳会　東九州支部
2011 年 10 月 25 日発行

青少年体験登山大会（2011 年　7 月 24 日　9：20　牧ノ戸登山口にて）

目　　次

1．会務報告
（1）臨時事務局担当者会議……　飯田勝之　2
2.支部活動報告
（1）第 10 回青少年体験登山大会……　下川幸一　2
（2）栗秋正寿氏の講演を聞いて……　星子貞夫　5
（3）7 月月例山行……　飯田勝之　7
（4）8 月月例山行……　中野　稔　10
3．個人活動報告
（1）はるかなる山の呼び声に誘われて……　星子貞夫　12
（2）チロル・ドロミテ山行報告……　星子貞夫　16
（3）北の哲人・ニペソツ山……　飯田勝之　19
（4）湯山 760・藤ヶ城 863……　安部可人　20
（5）三等三角点、因尾 508.3　安部可人　21
3．トピック
（1）「３４年のあゆみ」……　西　孝子　21
（3）より安全な登山のために……　安東桂三　22
（3）味わい登山……　久保洋一　24
（4）ペンリレー…「剣雑感」……　興田勝幸　25
4．インフォメーション
（1）視覚障害者支援登山……　26
（2）忘年登山と忘年会のご案内……　26
（3）50 周年記念誌の頒布……　27
（4）大分百山手ぬぐいの頒布……　27
（5）年間月例登山予定と報告……　28

1. 会務報告

臨時事務局担当者会議

飯 田 勝 之

去る9月10日（土）午前11時よりJAC本部会議室で臨時事務局担当者会議が開かれ、これに出席した。この会議は、来年度から公益社団法人へ移行するため、特に支部の位置づけと新しい事務処理の周知徹底をはかるため開かれたものである。会議冒頭、日本山岳協会の第10代会長に就任した神崎忠男前副会長があいさつに立ち「ともに協力して日本の登山界をもり立てていこう」と述べた。

このあと尾上会長があいさつで「会員の中に誤解があるようだが、公益法人として認定されるためにも、一般法人として認可されるためにも、いずれにしても会計制度を整備し、公益性を明確化して認定または認可を受ける必要がある。そうしなければ平成25年11月30日以降解散したものと見なされる。一般法人でいく方が簡易だと思っているのは誤りだ」と認識の共有を強調した。

続いて吉永副会長より『支部に関する規程』の変更について説明があり、

○支部は公益社団法人である本部と「一体とした活動」を行うことを明記して、

○支部長は支部が選んだ者を「理事会が承認し、会長が任命する」

○支部の経費は本部からの運営交付金と事業助成金をもって充当する。

○支部が受け入れた助成金、補助金、寄付金等は本部に受け入れる。

（領収証は本部会長名で出す）

○本部よりの交付金、助成金及び支部が受け入れた助成金、補助金、寄付金等は本部と「一体的」処理をする。

○支部は年一回以上総会を開催し、事業報告、会計報告、事業計画、予算を承認し本部に報告する必要がある。

などの規程変更の説明があった。

この後、会計や事務処理等について詳細の説明があった。

公益法人の正式な認定申請は総務省に対して10月末に行われ、これを国が委員会に諮問し、その答申により認定される。従って、正式認定されれば来年4月から公益社団法人としての運営を行っていく必要があるが、そのプレ処理のためにも、今年度の予算、決算に関する全て（領収書等の証拠書類も含む）を本部に提出するよう指示がなされ、今年度予算については9月15日までに出すように指示された。このため本部助成金にかかわる部分だけの予算書を直ちに作成のうえ14日に提出したが、今後は支部費や支部独自の雑収入などの支部一般会計と本部報告会計とに分けた処理が必要となろう。

2.支部活動報告

第 10 回青少年体験登山大会

（元気組） 下 川 幸 一

＜始めに＞

東九州支部の夏の恒例行事となっている青少年登山大会が、夏休みが始まった最初の日曜日の 7 月 24 日に、久住山を中心に行われた。2002 年 12 月に、国際山岳年を記念して青少年に山登りの楽しさ、自然にふれあうおもしろさを体験してもらおうと、竹田市の緩木山・越敷岳で実施して以来、今年が 10 年目の記念すべき節目の大会である。

参加者は大分駅発のバス組 39 名、牧ノ戸現地集合組 37 名で総勢 76 名という、これまでにない大規模な登山となった。うれしいことに、小学生・中学生・高校生（大分工業山岳部 11 名）や山ガール、若いファミリーのお父さん・お母さんがたくさん参加していただき、初心者も含めて幅広い年齢層の理想的なメンバー構成の体験登山となった。

参加者は本人の申告で、健脚組・元気組・のんびり組と三つの組に分け、健脚組（加藤英彦リーダー）は天狗・中岳・久住山のコース、元気組（下川幸一リーダー）は星生山を経て久住山のコース、のんびり組は（飯田勝之リーダー）は久住山だけという恒例の班構成とコース設定である。

以下元気組に参加した下川より当日の報告をする。朝 7 時に大分駅を出発したバス組 39 名は、初めに加藤支部長の挨拶があり、続いて飯田事務局長より団体山行の諸注意（隊列・歩き方・楽しみ方・やってはいけないこと等）の説明があり、最後に日本山岳会発行（パンフレット）のクイズを楽しみながら牧ノ戸に向かい 9 時到着。

＜元気組の久住山まで＝星生山・星生崎を縦走して＞

現地集合組 37 名も全員揃っており、受付後全員で記念撮影。総勢 76 名もの大人数の参加者で実に壮観であった。早速各組が目立つように赤・青・ピンクのリボンを帽子につけ、佐藤秀二会員による準備体操が和やかに行われた。

まず健脚組がスタート、続いて 9 時 25 分に元気組がスタートした。我々のメンバーは小学生3名を含む 9 名の少数精鋭チーム（？）である。舗装された登山道を登っていき、東屋のある展望台もそのまま通過しゆっくり登ってゆく。やがて木製の階段になり、沓掛山の肩の展望台に到着する。水補給の小休止の後、沓掛山目指して木製の階段を登り、岩の間から稜線へ進むと左に山頂が見えてきた。牧ノ戸から丁度 30 分経過している。

星生山目指してそのまま通過し、ハシゴや鎖を使って慎重に下ってゆく。小学生達も一生懸命ついてきている。やがて歩きやすい稜線を進むと展望のよい広場に出た。石段を登ると尾根の緩やかな登りが続き、小石がうず高く積まれたケルンが点々と並んでいる大地に出る。扇ヶ鼻別れだ。ここまで牧ノ戸より 1 時間 20 分、予定通りのペースに一安心する。

少し進むと、星生山に向かう登山道が左に分かれている。西側の尾根に取り付いて砂礫の道を登ると、正面に星生山西端の巨大な岩峰が迫ってくる。ゆっくり下り、すぐ急坂に取り付く。灌木の中の岩をよじ登り一気に尾根に出る。岩だらけの尾根を登ってゆくと、左に大曲ルートが合流する場所に出る。ここにはロープが張られており、環境省が希少植物保護の通行止め看板を立てていた。

ここから「元気組」9 名は一気にペースを上げ、11 時 20 分に星生山に山頂に到着する。扇ヶ鼻別れから 35 分で順調なるペースだ。

（星生山山頂　11；20）

右の眼下には平坦な西千里ヶ浜が延びており、「のんびり組」の一隊が見える。小学生の 3 人が大きな声で「ヤッホー」と手を振りながら叫ぶと、下の方から同じこだまが返ってくる。子供たちは大喜びだ。

山頂は 360 度の眺望ですばらしく、全員の記念撮影をし、星生崎目指してスタートする。岩だらけの道を下り、岩尾根の南側の縦走コースをとる。星生崎稜線の険しい岩場を慎重に登り、星生崎に飛び出す。そのまま避難小屋目指して、岩がゴロゴロした東尾根を一気に下る。12 時 5 分に避難小屋に到着。星生山から 35 分かかっている。既に「のんびり組」の姿は見えない。久住山山頂で3組合流計画のため、水分補給の小休止の後、久住山目指してスタートする。

（星生山東尾根稜線の岩場　11 ； 40）

子供達もかなり疲れており、お弁当を欲しがるが「もう少しだ」と励ましながら「久住分れ」の横をゆっくり登ってゆく。石ころだらけのだらだら続く尾根を登り続け、最後に右の急斜面をひと登りすると山頂だ。12 時 35 分、「元気組」全員が無事に久住山山頂に到着する。牧ノ戸峠から 3 時間 10 分は予定通りのコースタイムである。

山頂では既に 2 組のグループが到着しており、我々も急いで待望の昼食タイムとする。だんだん空模様が怪しくなってきたので、13 時に下山する事に決定。第 10 回青少年体験登山大会の横断幕を広げて全員で記念撮影。全員完登で久住山頂に集結し、思わずバンザイのうれしいショットだ。子供達も思い出に残ることだろう。
下山直前には、黒雲と風が出てきて今にも雨が降り出しそうになる。

（元気組の下山＝山の天気は急変する）

まず健脚組が星生山目指してスタートし、のんびり組、元気組と続いて下山開始。早いペースで岩場を一気に下り、約 20 分で避難小屋に到着した。全員を確認していると早くも雨が降り始め、やがて本格的な大粒の雨になってきた。遠くから雷の音も聞こえてくる。

牧ノ戸峠目指して避難小屋を急いでスタート。岩場の急登に続き、雨に濡れた岩の間を慎重に下ってゆく。いよいよ雨は本降りになってきた。雷の音がだんだん近づき、大きくなってきた。平坦な西千里ヶ浜を全員ピッチを上げて進む。周りは木が少ない岩尾根のため、危険な場所で気持ちは焦ってくる。

沓掛山へはハシゴ、鎖をつたって登り尾根伝いを急ぐ。足元は激しい雨で川のようになり、踏み場もない程の泥んこ道になってきた。沓掛山直下の展望台もそのまま一気に通過し、牧ノ戸峠には 15 時 15 分に元気組 9 名全員が無事にゴールすることが出来た。久住山からの下山総時間は 2 時間 15 分で、小学生低学年のペースでは雷雨の中かなり早かったと思う。全員が無事到着したのを確認して、雨の中で解散式が行われた。最年長は甲斐一郎会員、最年少は 5 人の小学一年生が表彰され、大きな拍手で敢闘を称えられた。

＜終わりに＞

今回は、突然雷雨に遭遇するなど山の天候の急変や大自然と接する楽しさを体験する登山を終え、バス組、マイカー組に分かれて岐路についた。事故も無く無事に終えたのも、会員・会友の皆さんの献身的なサポートのおかげと感謝しています。来年は更なるステップ・アップ目指して盛り上げていきましょう。

（元気組　中岳山頂にて　11;38）

お礼にかえて

支部長　加　藤　英　彦

第10回青少年登山大会にご参加下さり、まことに有り難うございました。当日は、前半は降らず照らずの、絶好の夏山歩きの天気でしたが、後半に雷雨に遭遇するなど、思わぬ気象変化に遭遇しましたが、皆様には、それぞれに楽しさを味わって下さったようで、主催者としましても感謝しております。

山の天気は急変すると、よく言われておりますが、そう言う意味では今回の登山はまさに「体験登山」であったのではないかと思っています。

山と自然を決して侮ることなく、そして自然を大切にしながら、自然と接する山登りの楽しさや面白さを、これからもより多くの人々に知って頂くために、私たちも頑張って参ります。

来年もまた、学校の夏休みの始まった最初の日曜日に、第11回青少年体験登山大会を開催する予定ですので、その折には是非またご参加下さいますようお願い申し上げます。同封の写真は、当日ご希望下さった記念写真です。ご査収ください。

2011年7月末日

栗秋正寿氏の講演を聞いて

星　子　貞　夫

栗秋正寿氏が第15回植村直己冒険賞を受賞した。この期に日本山岳会東九州支部では氏に講演をお願いした。

私は栗秋正寿氏に逢うのは今回で二回目である。2002 年の秋「大分山の会」の 20 周年記念に栗秋正寿氏をキャッスル・ホテルにお招きして講演を

お願いした。御挨拶をして前回のお礼を言った。すると 9 年前の事を良く覚えていて、ホテルの名まで先方から言われた。

講演の中でも高度、カロリー、気圧、温度、日時などの数字や人名の記憶がすばらしく、頭脳明晰な方である。体格は小さく、とても冬のマッキンリーの雪洞に二カ月も籠もる冒険野郎には見えない。講演依頼先で鞄持ちに間違えられると本人も言っている。

マッキンリーは北緯 63 度 05 分、西経 151 度に聳える北米大陸の最高峰(6194m)で現地語でデナリと呼ばれている。多くの登山者は夏季の 6 月にカヒルトナ氷河を遡行してウエスト・バットレスからデナリ・パスを経由して山頂往復をする。ウエスト・バットレスの下部にメディカル・キャンプ(4330m)といわれる台地があり、レンジャーが常駐している。

入山は軽飛行機でタルキートナーと言う町から写真の場所であるサウスイースト・ホーク・カヒルトナ氷河(2134m)にフライトする。

マウント・ハンター峰(4440.9m)は此のランディング・ポイントのそばに聳えるピークである。今回このピークの冬期挑戦が栗秋正寿氏の受賞に繋がった山である。メディカル・キャンプからも正面にいつも眺められるピークである。

高所登山を困難なものにする要因に高度順応、と強風がある。高度順応は人的要因が主で特異体質者で無ければある程度克服できるが強風は気象条件であり観察して避ける以外に方法がない。

風は速度が大きくなれば巨大な力を発生する。飛行機は自ら風を起こして浮いているのである。

1982 年 12 月 27 日エベレストに登頂した加藤保男氏、小林利明氏、1984 年 2 月 13 日マッキンリーに登頂した植村直己氏 1989 年 2 月マッキンリーに登頂した山田昇氏、小松幸三氏、三枝輝男氏等日本のトップ・クライーマーが遭難した。彼らの力量から遭難原因は強風によると推測された。

風の脅威は高所でなくても富士山、伯耆大山で私自身も遭遇している。

日本山岳会員の大蔵喜福氏は加藤保男氏の遭難を機に冬季ヒマラヤの風を調べ 1983 年 12 月 16 日にエベレスト冬期第 3 登がなされた。

また風洞実験で人体がどの程度の強風に耐えられるかを調べた。

その結果平地で直立出来る限界風速は 33m/s であり 36m/s では座っていても体が移動すると言う結果を得られた。

大蔵氏は岳友である山田昇氏の遭難を機にマッキンレイの気象、特に風速の測定をしようと決意する。

多くの人々の協力で困難を乗り越え、マッキンリーのデナリ・パスの上部の岩に気象観測機器を設置し 1990 年より 2000 年まで毎年 6 月に登り、データー収集と機器の補修を行った。

観測の結果最低気温は-59.4℃、最高風速は 82.5m/s で此の時は機器が破損していた。これら

の結果から植村直己氏、山田昇氏、小松幸三氏、三枝輝男氏の遭難は烈風によるものと断定された。

1998 年 3 月、栗秋正寿氏は冬期マッキンリーに単独登頂し、現地では植村を超えたと讃えられた。

従来の登山はある程度の日程を決め、タクティクスを立てて、好天を掴んで短期間に登頂、下山と言うパターンである。この行動が烈風に遭遇す

れば遭難につながる。

栗秋正寿氏の登山スタイルは従来のやり方と全く異なり、登山の前に先ず山に住みしかも烈風に強い雪洞に住み、安全な日のみ行動して高度を上げる。従って日数も 2 ケ月、食料も大量に搬入する。逆に考えればマッキンレイの冬期登山はその様にしなければ安全を得る事が出来ない程過酷な環境であるといえる。講演の中で 20 日間一歩も雪洞を出られなかった事もあったと言われた。逆転の発想が氏の安全登山を支えていると思う。

その様にしても未だハンター峰は登頂出来ていないことを考えると、冬期マッキンリーがいかに人を寄せ付けない魔の山であるか、又其れに挑戦する栗秋正寿氏の沈着冷静な行動と勇気と忍耐に敬服するものである。

再度ハンター峰に挑戦し是非成果を上げて欲しいと祈るものである。

（注） 参考図書　大蔵喜福　著　マッキンリー気象観測機器設置登山隊 11 年の記録

７月　月例山行報告

御岳(みたけ・479m)、洲藻白岳(すもしらたけ・518m)、龍良山(たてらさん・558.5m)、有明山(ありあけやま・558.2m)

飯　田　勝　之

時計は午前 4 時半を少しまわったところ。出発した時はまだ真っ暗で、ライトをつけて走る車はトヨタハイエース、10 人乗りだが中古でナビゲーターが壊れている。それでも対馬で借りられる数少ない大型ワゴン車だ。乗っているメンバーは、今回の月例山行参加者 7 名。7 月 30 日（土）、今月の『島の山旅』は長崎県対馬だ。前夜博多港を九州郵船のフェリーで出て厳原港についたばかり。次第に明るくなっていく道は対馬の山間を縫うように走る国道 382 号。北へ北へと走り、車は 6 時少し前に最初の山、御嶽登山口についた。

入り口に「壱岐対馬国定公園・御嶽」の看板と鳥居がある。鳥居をくぐり照葉樹の林の中を登っていくと「御岳特定動物生息地保護林・対象動物ツシマヤマネこ」の看板がある。「ツシマヤマネコに会えるかもしれな」と密かな期待を込めて登っていく。登山口から 40 分、まだ新しい木造の社の前に着いた。ひと休みして神社の横を登るとほどなく稜線だ。平岳への道が右へ延びている。ここより左へ緩くわずかな登りで御岳山頂 7 時 30 分到着。

（御岳山頂で）

石の祠がたくさんあり、多聞天や荒神や地蔵尊などが祀ってある。全員の記念写真を撮って山頂から平岳へと縦走、と言っても、ほぼ平らな稜線を 40 分足らずで着く。名前の通り平らで深い木立の中に北の島で唯一の 1 等三角点があった。

皆はここより縦走路をさらに進んでドウ坂の峠へ下り、久保さんと私は車を回すため戻る。しかし、往路をそのまま引き返すのは面白くないと、途中から地図に破線ある古い道に入る。だがやがて道は消えてしまい、ＧＰＳを頼りに下るが、地図上の破線は崖で下れない。やむなく左に回り込んで下るが次第に破線から遠ざかり、軌道修正するのに尾根を三つもトラバースする羽目になる。飛んだアルバイトで、往路を下れば 1 時間足らずのところ 1 時間 40 分もかかり、縦走組みを待たしてしまった。（スミマセン）

車は国道 382 号を引き返し、二つ目の山洲藻白岳へ。県道 24 号を西に行き、洲藻の集落から林道を南へ洲藻川を遡るとやがて林道終点。小滝のある横から登山道に登る。スギ林の緩い登りから急な登りになると照葉樹林となる。石の多い急な登りは結構きついし、午前中以上に蒸し暑く、汗が絶え間ない。ときおり道脇で芳香を漂わせるクチナシの白い花がわずかに涼気を呼ぶ。

登りはじめて約 1 時間、鳥居のある上見坂への分岐へ。「山頂まで 30 分」と書かれた標識があるが、あとで分かるがとても 30 分では登れない。白岳神社と書かれた石の鳥居をくぐり、その奥の木の鳥居をくぐって登っていく。

小さな広場で休んでいると、1 人の男性が下りてきた。頂上までを聞くと、下りでここまで 30 分という。まだそんなにあるのか。たかだか 500m の山とタカをくくっていたが、結構きつい山だ。さらに 20 数分。石積みの小広場。山頂直下で、頭上に岩がそそり立っている。ひと休みして、岩場の急登、岩の双子峰の間を通り、反対側に回り込んで西の岩峰へと登っていくとやがて大展望の山頂だ。14 時 10 分着。岩峰の上は、さすが九州百名山に選ばれただけに、その高度感と展望は、蒸し暑い登りの疲労感を吹き飛ばしてくれる。明日登る有明山が近く、その右手に対馬最高峰の矢立山(648.5m)が見える。

（洲藻白岳山頂で）

下山は往路を引き返す。林の中の急な下りは蒸し暑く、みんな黙りこくってひたすら下る。下りながら汗が噴き出す。登山口に 15 時 55 分到着。滝のある沢に下りて、冷たい水で濡らしたタオルで体を拭く。やっと人心地がついた感じだ。

あとは今宵の野営地、鮎もどしキャンプ場へ。途中の厳原のスーパーで今宵と明日の食糧やビールなどを買い込んで、県道 24 号を南下。途中にある内山の旧道の峠にある展望台から対馬南部の山々の景色を楽しんで谷間に下って鮎もどしキャンプ場着。管理のおばちゃんが言うには市への予約が要るとのこと。今夜は韓国の団体施設は満員だそうだ。しかし、テント持ち込みなので使用料 1 人 200 円払えばＯＫ。

吊り橋を渡り、ハングル語が飛び交っているキャンプサイトの一番奥、炊事場とのその奥の小広場に今宵の野営地を設営。テントを張る人、お湯

を沸かす人、食糧を出して準備する人・・・、紅一点の宮本さんがワンタン汁を作る。そして、待ちに待った宴会だ。冷たいビールがひとしお美味しい。蒸し暑かった山道のつらさを吹き飛ばしてくれる。

翌 31 日の朝、食事を終えて撤収作業中にいきなり久保さんが「あいた、痛い」と頭を押さえる。「蜂にやられた」よく見ると、炊事場の天井に作り始めたばかりのキイロスズメバチの巣と、数匹の蜂が見える。「気をつけろ」と言いながら撤収していると、私の右腕にいきなりチクリ「いっ、痛い」そのあとまた久保さんが「痛い」2 度目だ。何故か急に攻撃的になった蜂が、撤収作業をしている我々を襲い始めた。タオルや帽子を振りながら逃げ回りつつ荷物をまとめて、やっと車へ。とんだ、朝だ。刺された久保さんも、私も幸いにたいしたことは無さそう。

車で今日の最初の山、龍良山へ。「鮎もどし自然公園」への道をさらに奥へ入ると登山口の導標があった。時刻は 7 時ちょうど。素晴らしい照葉樹の原生林の中を登り始める。樹齢数百年を越えると思われるスダジイやアカガシが至るところに見られる。ツバキやヒシャカキ、タブなどでこれほどの巨木を見たことがない。ここは国指定の天然記念物の原生林。これほど里に近く便利の良いところの林を、あれほど全国の原生林を伐りまくった林野庁が伐り残したというのは奇跡的なことだ。

原生林の登り 30 分でヒノキの林となり、再び照葉樹の二次林の登りでやがて稜線の鞍部へ 8 時 00 分着。西へ稜線を登る。大きな岩の多い、ぬれた斜面は滑りやすい。蒸し暑い登りが続く。巨岩の上を登り越すと展望地。そこからさらに 2 分ほど行った木立の中が山頂で、3 等三角点がカヤに埋もれている。山頂で記念写真を撮ってすぐに引き返し、手前の岩峰上で休憩。缶ビールなど交わして展望を楽しむ。下りはいっそう滑りやすい。しかし足は速くなる。蒸し暑い中、黙々と下る。9 時 50 分登山口着。

（龍良山山頂で）

続いて今回最後の山、有明山だ。帰りの船の都合があるので最短な道を選ぶ。厳原の手前から県道 44 号の山道を上り、上見坂公園入口の峠から入る林道が登山口に通じる道だ。未舗装の林道をおおよそ 1.5ｋｍで鎖のゲートがある。ここより有明山への稜線歩きが始まる。と言っても、しばらくは林道だ。

緩いアップダウンで、ゲートから約 1 時間、468.0ｍの三角点のある小ピークの横から林道をそれて山道に入る。少し急な道を登ると稜線上の緩い登りとなり、ヒノキの林を抜けて、茅野の中を行くとほどなく平らな草原上の山頂に着く。真ん中に対馬の南島で唯一の 1 等三角点がある。万年山や佐賀の天山を思わせる広い平らな山頂だ。北に昨日上った白岳の双子峰が見え、南西に矢立山が見える。

（有明山山頂で）

ここからみんなは久田道を通って厳原の町へと下るルートをとり、久保さんと私で車の回収のため往路を引き返す。帰路は登り以上の早足で、やたらと蒸し暑い中を二人はまるで怒ったように無口で黙々と歩く。13 時 00 分、ゲート到着。あとは、車を空港近くのレンタカー本店へ返し、送迎車で厳原港へ送ってもらって皆と合流。

対馬の山はこれで終わり。夏の島の山は蒸し暑い。これが今回の教訓であったのか。対馬は読み難い地名が多い。鶏知（けち）、豆酘(つつ)、女連（なつら）、鹿見（ししみ）・・・

参加者…加藤、星子、飯田、久保、下川、渡邉、宮本

コースタイム

◎御岳登山口発 6:10～6:50 神社 6:55～7:30 御岳山頂 7:40～8:20 平岳 8:40～（コース・ロスト）～10:20 登山口着（全員は 9:20 分ドウ坂峠着）

◎白岳登山口発　12:25～上見坂分岐　13:10～14:10 白岳山頂 14:35～15:10 上見坂分岐～15:15 登山口着

◎龍良山登山口発 7:00～8:00 鞍部 8:05～8:35 龍良山山頂 9:00:～9:55 登山口着

◎ゲート発 10:55～11:40 登山口～12:05 有明山山頂 12:10～13:00 ゲート着

8 月月例報告

達磨山（105m）、城山（62m）、矢筈岳（266m）

中　野　　稔

姫島の盆踊り見物が今回の主役である。朝 6 時 20 分にサニーを、初参加の後藤さんのマイカーと二台で出発。別府の楽天地入口の近くで飯田さん、九州大学病院の入り口で遠江さんを乗せて、三人と四人に分かれて再出発。7 時 20 分頃飛行場の近くのコンビニで、五人乗せている久保さんの車と合流。伊美港には 8 時 15 分頃到着。近くの神社にお参りする予定だったが、8 時 40 分の便の次が 9 時 50 分という事で、急遽変更して慌てて乗る事になった。

9 時過ぎに姫島港に到着。フェリー待合所の二階で本日の打ち合わせを行う。達磨山迄は全員で行動、飯田さんは一時間百円のレンタル自転車で三角点捜索、西さんと遠江さんは港で盆踊りの場所取りと散策。残りの 9 名で矢筈岳を目指すという話になった。

9 時 20 分頃港を歩いて出発。達磨山の東南の尾根からルートと西尾根からのルートがある。今回は西尾根ルートでピストンという事になりメインテーマは、十年以上見つからない達磨山の三角点捜索である。登山道は年に二回ぐらいは整備されている感じがする。南のピークには神社と沢山の祠があり信仰の山であり神聖な場所だ。ジェームス･チャートワードの書籍に書かれている言葉が脳裏を横切る。「肉体は神なるものの住む神殿である。いつ来てもいいように準備していなさい。」、心も肉体も部屋や家も地域も山も同じだという事だ。達磨山の山頂には、清正公社（祭神・加藤清正・4 月 29 日）があり、9 時 55 分頃そこで記念撮影をし、飯田さんが三角点を探している北のピークに向かう。尾根の藪こぎで行けば 5 分ぐらいの所だ。

＜達磨山南峰にて＞

11 名での三角点探しが始まった。金属の棒か、鎌などの道具が必要だ。本格的に探そうとした矢

先、下川さんが枯れ草と草木の繁みの中に埋もれていた三角点を見つける。飯田さんが集中的に探していた１m位東の場所である。ポイントである岩の北東 1.3mだ。三角点の周りを清掃して 10 時半前に記念撮影。展望も無い樹海だがそれなりに楽しい。道中ミズヒキの赤と白を見かけた。四国の二ツ岳（1、647m）の登山道で見かけたミズヒキは 1m位の長さがあり群生していたのを思い出す。

＜達磨山三角点にて＞

後藤さんの提案で城山経由で観音崎の黒曜石を見に行こうという事になり、昔登った記憶と港の小父さん達からの情報を分析し、(11 時 11 分) 古庄家の脇の登山道から行く事になった。登山道は立派に整備され、案内板も到る所に設置され、短歌も書かれているが散歩道程度だ。でも初めての道であるから緊張もし楽しい道中となる。気楽に考えながら、わかれ道を右や左に行くわけで、出たとこ勝負なところが快感である。(11 時 17 分) 城山山頂がはっきりしないので、適当な広場で写真撮影。途中、採掘現場で崖になっていたので、後藤さん、下川さん達は民家の見える道路へ下って行った。久保さんは持ち前の開拓者精神で、削り採られた淵の周りを適当に歩きながら林道の様な感じの道へ下っていく。つられて石川さん達もついて行くので何処に出るやらと思いながら行くと、目的地である観音崎の登山口付近に降り立った。待つ事 15 分で 5 名が到着。

＜城山城址広場にて＞

昼食後、3 回ほど来ている私が荷物番で、(12 時 15 分)8 名で火山の溶岩で出来た黒曜石見物。溶岩でできた岩場だ、浅間山の鬼押出し比べたらミニチュアだが周囲が海なので楽しい所だ。(12 時 30 分) 矢筈岳に向かって出発と思ったが、途中約束のかき氷屋さんで腹ごしらえ。(13 時 10 分) 港のフェリー乗り場の 2 階で寛ぐ、西さんと遠江さんを見かける。

(13 時 30 分) 小休止してから登山開始。汗が吹き出し 3 回ほど小休止。登山道は風があり思いのほか涼しい。(14 時 15 分) 山頂で記念撮影。下山道は参加者の知らないルートで行く事になったが、心配する人が多く不審がっていたが、久保さんが先頭に立ち多少草が煩わしい登山道を下り出した。

＜矢筈岳山頂にて＞

10m位下ると、1m以上草が刈られている感じの道に安心をしたのか 30 分余りで東浦のバス停に到着 (15 時 30 分)。そこの自販でジュースを

買ったが、無料村営バスの停留所であり、拍子水温泉の行き帰りに其処にとまったのである。

東浦から大海トンネルを通ってフェリー乗り場へ向かったが、拍子水温泉に行くことになり希望者は村営の無料バスに乗るべく最初のバス停で待つことにした。所要時間は 5 分ぐらいで温泉に到着、帰りは 5 時過ぎのバスで港に帰り盆踊りを見学するために待機組と合流。7 時からの開始までに時間があるので最寄りの食堂で姫島の味を堪能する。空腹に不味いものなしとくれば言うことなしだ。

姫島の狐踊りは 3 回目だが、百枚近く取った一番最後の写真には、文字通り無数のオーブが物の見事に写っていた。見てみたい人や欲しい人は申し出てください。希望を叶えたいと思います。流石狐踊りだ、ご先祖たちも見物に来たのかなと思ってみたりした。

帰りのフェリーは難民船の疑似体験をし、貨物にでもなった気分を味わえた。伊美港の駐車場で流れ解散となり、全員無事に帰宅出来たということは、ご先祖様たちのお陰だと思いたい心境になった。

＜盆踊り会場＞

＜狐踊り・最後の踊り＞

参加者…西、下川（智）、遠江、牧野、飯田、下川（幸）、後藤、石川、岐部、佐藤（秀）、久保、中野

３．個人活動報告

“はるかなる山の呼び声に誘われて”

（2010 年 6 月カナダの山旅日記）（NO３）

期日　2010/6/22～7/4

星　子　貞　夫

6 月 27 日

カナダに来て 6 日が過ぎた。ゆっくり温泉に入るべくラジューム温泉に行く。遠いのが難点である。往復 5 時間のドライブである。運転をしてくれた松井氏に大変感謝している。

バンフを過ぎて国道 93 号線を南下し 95 号線と合流する所にラジューム温泉はある。この道路の沿線はクートネイ国立公園で 94km の長さあり、温泉はその西端にある。

ドライブの途中エルクのつがいにであった。

データーによるとこの温泉は１リットル当たり 700 ﾐﾘｸﾞﾗﾑのミネラルを含み毎分 800 ﾘｯﾄﾙ湧出する。源泉の温度は 44℃、無臭で微量のラ

ドンを含む世界でも珍しい放射線温泉である。

先住民は多くの疾病に効果があるとして古くから利用していた。

多くの男女が水着姿で湯を楽しんでいる。我々も子供に返り泳いだり潜ったりして遊んだ。

充分に入浴を楽しみ土産店により 14 時 45 分にラジューム･ホット･スプリングスを後にする。往復 5 時間のドライブでキャンモアのスーパーセイフウエイに 14 時 35 分に到着し、食材とワインを仕入れて B&B にかえる。

6 月 28 日

朝から曇り空で雨模様の天気である。

今日はヨーホー国立公園のエメラルド･レイクを見下ろすヨーホー・レイクを回り、バージエス・ヘリテージ・トレイル約 21km のトレックである。

10 時頃湖のほとりにある駐車場に着いたが雨が上がる気配がない。湖をかこむ山々エメラルド・ピーク(2540m)、ミッシェル・ピーク(2696m)、ワプタ・マウンテン(2778m)、マウント・フィールド(2635m)、マウント・バージエス(2599m)は雲に隠れている。

暗い天候と雨足のため､湖面はエメラルドの名に値しない｡トレッキングを中止する相談をしたが、長距離を運転して来たこともあり、せめて湖

一周のトレッキングでもと言うことになる。

傘とカッパで出発する｡西岸から時計まわりに歩きはじめ、周囲 4.6km の湖を一周する。湖岸に咲く花々を見るたびに歓声が上がり､ゆっくりと約 2 時間でスタート地点のロッジに着く。ひとしきり激しく降った雨も昼頃止み外で昼食出来た。

帰路ヨーホー･谷を遡行しデリー･グレーシャーから流れ落ちる落差 380m のタカッカウ･ホール(Tkakkaw Falls)を見学する。

18 時 30 分夕食の支度中に荒金さんが右親指を負傷し流血が激しく、チャーリに頼んでクリニックに行く。2 時間位で処置も終り大事に至らなかった。今山さんの機敏な処置に感謝する。

6 月 29 日

予定では予備日としていた。

7 月 1 日がカナダ建国記念日で市内パレードがあり、交通制限がしかれるので予定を変更した。

プレイン　オブ　シッスグレーシャー　トレイルを歩き帰路レイク･アグネスの湖畔に建つティー・ハウス(2134m)を巡り、リトル・ビーハイブ(2210m)、ミラー・レイクを経由して約 17km のトレッキングとする。

レイク･ルイーズを起点に先日登ったフェアビュ･マウンテンの岩壁を対岸に仰ぎ、湖の北西岸を末端まで歩き、マウント・アバディーン(3151m)、ザ・ミッテル(2998m)、マウント・リフロイ(3423m)を左に見ながらビクトリア氷河のラテラル･モレンをたどり森林を抜けるとティー・ハウス(1200m)
に着く。

このティー･ハウスは 1924 年にカナディアンパシフィク・レイルウエイによって建てられた。ここで昼食をとりさらにモレン帯を 30 分のぼりロアー・ビクトリア氷河の正面に達し、屏風のようにそそり立つマウント･ビクトリア下部に達する。ここが最終のビューポイント(2400m)である。マウント・ビクトリア(3464m)とマウント・リフロイ(3423m)の谷をアボット・パス(2922m)とい

い、デス・トラップ(The Death trap)と呼ばれている。この鞍部にカナダ山岳会のアボット・パス小屋が確認できた。

午後気温が上がりマウント･リフロイの岩壁から雷鳴のような音を度々轟かせて氷が崩落していた。

17 時 00 分に車に帰る。

6 月 30 日

カナダ･ツアーの最大の目的の一つはカタクリの群生を見る事であった。カタクリの花は雪の下で開花の準備をし、雪解けと共に一斉に開花する。雪が残っていると花が見られない。予定を変更して最終日に行動する事にした。

バンフから 9km のインター・チェンジからサンシャイン・ビレッジ・ロードにはいり、スキー場リフト乗り場(1675m)に駐車してトレッキングが始まる。

最終目的地のヒーリー・パス(2330m)まで片道約 9.2km のコースである。ヒーリー・クリークと呼ばれる小川のほとりを歩く。

森林のなか平坦な登山道を 9km ほど行くと、ヒリー・クリーク・キャンプグラウンドに着く。トイレやゴミ箱、フード・ストレイジが用意されている。

ロッキーは熊の居住地なのでキャンプ地には全てフード・ストレイジが用意されている。
キャンパーはテント内で食事をしてはいけない。フード・ストレイジのある場所で食事をして、食事に関するすべての物をポールか樹間に張られたワイヤーに吊るすか熊の開けられない大型ロッカーに入れる。残飯も土に埋めてはいけない。食器を洗った水も地面に捨ててはいけない。川の流れに流さなければならない。

キャンプ・サイトから 2km、クリークを渡った頃からなだらかな登りとなり、黄色いグレイシャー・リリ(カタクリ)がアルパイン・メドーいっぱいに群生している。ウエスタン・アネモネ、も固まって咲いている。皆　我を忘れて写真撮影である。はるか彼方にアシニボインの頂上もみえる。

峠には雪が残っていたがその下にも出番をまっている花々が有ることだろう。

感激の一日であった。
帰路　秋山祐司氏に逢う。「カナディアンロッキー高山植物」の著者である。

来年開催されるモンブラン一周マラソンに参加するという青年をガイドしてトレーニングのアシスタントをしていた。挨拶をして本を購入した事を話す。

7 月 1 日

今日はカナダ建国記念日である。

午後 1 時からキャンモアのメイン・ストリートでパレードがある。市内は交通制限される。

午前中バンフのアッパー・ホット・スプリングで入浴し、午後キャンモアに戻り、パレードを見学する。バラの花やキャンディを貰って大喜びである。

7 月 2 日

明日はカナダを去る日である。

全財産をはたいてお土産を買おうと空のザックを担いでバンフに出かける。

映画「帰らざる川」のロケ地ボー・ホールやキャッスル・ホテルを見て回り記念撮影をして 15 時までそれぞれ自由に町を楽しんだ。

最後の夕食会はキャンモアのボー・バリー・トレイルにあるレストラン・パトリノス(Patrinos)でアルバーター牛のステーキを食べた。

7 月 3 日

二週間滞在し B&B モナークのオーナー　フミタカ　チャーリ　オガワ氏とも息投合し、我が家のようになじんだ宿とも別れ、カルガリー市内の 7-11 で最後の給油をして 12 時 25 分発の AC009 便に乗り 4 日の 14 時 00 分に成田に着く。一人バンクーバー乗り換え便で着いた清水さんとも成田で合流し 19 時 55 分福岡空港に降り立つ。

長いと思った旅も終わってしまえば感激と、このまま続けばと思う気持ちがいりまじって複雑である。

今回の旅が無事終わったことを感謝します。
B&B　モナークのもてなし、夕食を分担して作って呉れた皆さん、すべての運転を引き受けてくれた松井氏に感謝します。

有難う御座いました。

チロル・ドロミテ山行報告

期　　日　　:2011/6/23　　～　　7/3

星　子　貞　夫

天候:、晴れ

メンバー: 星子他11名(坂本映子 永井邦子 梅香家鎮 梅香家成子 清水道枝 佐藤博久 柴崎康訓 大倉田鶴子 長田美津子 内山真木子　前谷東雄 敬称略)

山域　オーストリア・チロル、イタリア・ドロミチ、ベニス

憧れのチロル、ドロミチの山旅である。

いつも外遊の際飛行機や宿の手配をお願いしている前谷氏の、今回はツアー・リーダーによる旅である。

東京組6名、大分組6名総勢12名、2台のレンタカーで移動した。

６月２３日

旅立の日は何時も早朝である。所が今回は違った。12時半の大分駅集合である。梅雨の晴れ間の暑い日である。全身大汗をかきながら、それでも町の風景がいつもと違うと感じなから集合場所へと急ぐ。

坂ノ市から梅香家夫婦、別府から清水さんが乗り込み大分組6名が揃う。

今回のフライトは福岡-関空-ドバイ-ミュンヘンである。エミレーツ航空の関空発は23時35分であり、福岡から適便がないので、伊丹からシャトルバスで関空に行く。

６月２４日

ドバイ空港は5回目である。広さと人の混雑

で疲れる。

東京組の5名と合流する。1名は仕事の都合で一日遅れる。

約3時間半の待ち時間の後8時35分にドバイ空港を離陸しイラクのチグリス川を眼下に見てトルコ、黒海、オーストリアを飛びドイツのミュンヘン空港に13時に着く。ミュンヘンはドイツ、バイエルン州の州都である。

ここで9人乗りワゴン車と普通乗用車をレンタルする。流石にドイツの高速道路である。流れる車の速さに体が硬くなる。

今日の宿はスチューバ谷の中央に位置するノイシュティフト村のホテル･クリマで前谷氏の定宿である。この辺りはまだ谷幅も広いが、更に奥に進むとスチューバ氷河を抱く、シャフェルスピッツエ(3333m)が聳えトップ　オブ　チロルと呼ばれる、スチューバ・アルペン界隈となる。

宿は谷の少し高台にあり、一軒家で角にサクランボの身をたわわに実らせた桜の木が一本あり、

屋根伝いに収穫できる。

6 月 25 日　晴

早朝一人で宿から見える草原の高い道を散歩する。気温は３℃で肌寒いが坂道は少し汗ばむ。道が平になり周囲の民家やホテルを眺めながら歩いていると、第六田園のメロディが自然と口から出てくる。遠くの岩峰、針葉樹林帯、その際まで手入れの行き届いた緑の草原、中に点在する民家、これがチロルなのだ。

今日はクロイツ・ヨッホにハイキングする。

谷を少し下りマジソン郡の橋と同じ屋根付き

の橋を渡るとファルプメスの部落である。クロイツ・ヨッホのケーブルはここから出ている。

標高 1000mから二本のケーブルで 2136mまで上がり、ゼニヨッホスチューバー(2225m)まで行く。

ケーブルを降りると直ぐに十字架があり、名称は此れに由来している。道は破砕の岩稜帯で所々フェラータがセットしてある。油断すると谷底まで転落する危険がある。

岩稜を過ぎた草原で昼食をし、長い下りを中間駅まで歩く。

6 月 26 日　曇後晴

初日の長い下りで少し体が痛い。ストレッチをして体をほぐす。

宿のベランダから見えるピーク、エルファースピッツエ(2505m)に登る日である。

ノイスティフトのパーキング･ロットの横にケーブル駅がある。(1812m)の山頂駅周辺はパグライダーのスタート地点となっている。

パラドライバーでもある前谷氏の勧めでタンデムフライトをする事になり６名が申し込み、下山後 15 時にフライトを開始する事になる。料金は 90 ユーロである。

山頂駅から斜度 40 度ほどの草原をジグザクに登ると、2080mの台地にエルファーヒュッテがある。ここは吾らが泊っているホテルのオーナーが経営しているとの事である。

ここを過ぎると道は登山道となり、いよいよエルファースピッツエに向けてのクライミングとなる。岩稜を登り狭いカール状地形の岩壁の下で食事して更に岩峰を目指す。

最後の頂上はロッククライミングになるので迂回して進み、ツベルフェルニダー(2336m)に下り、山麓をまいて 14 時 20 分にエルファーヒュッテに着く。

いよいよパラフライト初体験である。今から始まる冒険に憧れと怖さの葛藤で何回も小便に行く。外野も冷やかしを結構楽しんでいる。

パイロットが 3 名なので 2 回に分けてフライトする。

ヘルメットを被りハーネスを付けると身が引き締まる。空中に飛び出した瞬間少し気分が悪くなったがなんとか持ち堪えてビデオを映した。周囲の景色は山頂から見るのと同じで爽快感は涌かなかつた。足がぶらぶらして不安定であつた。

そんな時突然旋回し始めた、今まで正面に水平に見えていた山波が縦になった、そして視界から消え空だけとなり草原の中の家々がぐるっと回

って又戻ってきた。

地上 5m位になりスタンダップと言われて腰を伸ばして立ちあがった。空中で歩くように足を動かしそのまま着地した。

一度飛んで見たいと思った事はあったが、チャンスは突然やって来るものだ。

やがて気温が上昇して風が強くなった。第二グループは陽が傾いて風が収まるまでフライト待ちとなり随分待たされた。

皆初めてのフライト体験を大変喜んでいた。

6 月 27 日　快晴

ホテル・クリマを辞し、オーストリアから有名なブレンナー峠(1370m)を越えイタリアに入る。トンネルが開通し峠越えも楽である。

教会の尖塔が必ずある部落、ローマの遺跡らしい城塞の様なもの、斜面に整然と植え付けられたブドウ畑(ワイン畑)、足元を流れる渓流イサルコ川(F.Eisarck)、綺麗に手入れされた緑の牧草地の間にそれらが点在し、何処を切り取っても絵になる風景のなか風を切り裂いて車は走る。

ドロミチを知り尽くした前谷氏の運転は少しも不安を感じさせない。後続のベンツは佐藤氏の運転である。全行程を全て二人の運転で安心の旅である。

高速を降りフネス谷を遡行し、カメラマン垂涎の地と言われる最奥までドライブし、ガイスラー・グルッペ(Geislargruppe 3025m)と呼ばれる山塊を見る。教会の尖塔を前景にした山の風景がすばらしい。

ドロミチ独特の尖峰の塊のガイスラーの前に緑の森林、其れに続く良く手入れされた牧草地帯のうねり、点在する農家、バランスの取れた風景である。

牧草地の端で昼食をとりフネス谷を後にする。今日の宿はコルバラ(Corvara 1568m)である。ガルディナ谷(Val Galdena)を遡行ドライブする途中の休憩地でワインを飲みながらサッソルンゴ (Sassolungo 3181m) サッソピアット (Sassopiatto 2958m)の岩峰を見る。谷間には残雪が残っている。明日はあの雪渓を歩くのだ。ガルディナ谷の最奥は、ピッツ・ボエ(Piz Boe 3152m)のあるセラ・グルッペ(Sella Gruupe 3152m)の山塊である。サッソルンゴとセラ・グ

ルッペの鞍部セラ・ヨッホ(Sellajoch 2244m)に立ち寄り、遠くにドロミチ最高峰の雪を戴いたマルモラーダ(Marmolada 3342m)を遠望し、一度戻ってグロデナヨッホ(Grodner Joch2115m)をこえてコルバラに下る。

コルバラのホテルの名はアルララ(Arlara)発音が難しい。部屋は広くツインベッドとソファーもあり、バス、トイレ、ビデの設備がある。

北の哲人・ニペソツ山

飯　田　勝　之

この瞬間を私は待っていた。登りきってハイマツを分けると目に飛び込んできたはるか前方にそそり立つ巨大な岩峰。麓から長い間、頑なにその姿を見せるのを拒んできた山頂が、いきなりその全容を見せる時である。「全く意表を衝くニペソツの現れかただった。それはスクッと高く立っていた・・・・」と深田久弥が書いている。「峨々たる岩峰をつらね、その中央にひときわ高く主峰のピラミッドが立っている・・・」とも・・・。ここまで登ってこなければ見ることの出来ない光景なのである。

遠くの山頂や稜線からは、威風堂々と見えるが、いったんその峰に登ろうとすれば、麓からも、途中の道のいかなる場所からも頑なに見ることを拒み続け、その直前にいきなり、劇的なほどの対面をさせる。こんな山は私はほか知らない。実に思わせぶりな山である。

この思わせぶりなニペソツ山は私にとっては10 年来の密かなあこがれの山であった。2001年の夏、大雪山からトムラウシへ縦走し、雨上がりの化雲岳山頂付近の『神遊びの庭』と名のつくお花畑に夢中になっていたら、前面の雲海が下がり、その雲海の彼方に黒々とそそり立つ勇姿を見せたのが初対面であった。やや左に傾いたように高いその時の山の姿こそ、遠い北海道の中でもすぐれて秘境の地にある山と聞いていたニペソツ山である。

雲海の上に浮かぶ黒々としたその山容はまさに『北の哲人』のイメージである。その姿は私の脳裏に焼き付けられ、「何時かは・・・」という思いを秘めさせられた。しかし以降の毎年の夏山計画は、遠い北海道までなかなか届かず、いつしか 10 年過ぎていた。今年の夏山計画、10 年前と同じメンバーで持ち上がったのがこの峰である。

ところが、この山は見た以上、思った以上に手強かった。長い、長いアプローチの稜線を登り、小天狗の岩場を過ぎて何度もアップダウンの末やっと登り詰めたここ、前天狗の肩はもう 1860 mである。一山登った感じのところである。

（前天狗から見たニペソツ山）

劇的な出会いの期待に胸をふくらませて登ってきたものの、ここまでの登りは相当なものだ。期待通りに前に見えるニペソツの眺めは雄大だ

が、これからあそこまで登るのかと思うと、むしろこれからが本番といった感じである。いったん100m近く下って、ほぼ同じ高さまで登り返してみると、その向こうにはもっと深い鞍部がある。その鞍部までの下りは実に情け容赦なく、下るにつれ　て見上げるめざす山頂はどんどん、理不尽なほど高くなっていく。そして最後には約 300m余りの登りが待っている。

思わせぶりと言えば、眺望までがそうである。前天狗の手前から、右手の方に絶えず見えている表大雪の残雪を見せる山並み。その左手に遠く続く十勝連峰までの眺望。しかしトムラウシと十勝岳の山頂部はずっと雲に包まれたままであった。ニペソツの山頂直下はこれらに背を向けて登るのだが、登り終えて一息ついて、見るとトムラウシも十勝の山並みもくっきり見えている。この眺望の段取りも何と思わせぶりであろうか。

思わせぶりと言えばもぅ一つあった。この北の絶顛で見飽きることのないような眺望を堪能し、下山しているときのことである。山頂直下の岩礫の斜面で、登る時には絶えずあちこちで『チッチ、チッチ』と鳴き声ばかり聞こえていたが、下りの時には『チッチ、チッチ』の声とともに、あそこに岩に、こっちの岩に、そこ岩にと、チラッ、チラッとその可愛い姿を見せる何匹ものナキウサギ。

そしてついにその中の一匹。我々が下っていく正面の岩の上にちょこんと座って動こうともしない。まるで『さあ見てお行き』と言わぬばかりだ。先頭を行く私のわずか 4mほど先のところだ。みんな、声を潜めて感歎の声。向こうが動かないからこっちは動けない。こっちが動けないから向こうは動かない。・・・・・、後ろで「パシャッ」と一眼レフの音。小さな姿は岩の中に消えていった。

ニペソツ山は見応えのある山、登り応えのある山、そして実に思わせぶりな山であった。

湯山７６０、藤ヶ城８６３

安　部　可　人

この2山は三角点なし。74歳、歴史に興味、好奇心で行くしかなかった。湯布院衆の一人、奴留湯氏（温湯ぬるゆ温泉あり）、その城跡が大杵社の千年杉の裏山にあり、無理、登れない。西の林道がきになっていた。やる気になれば簡単。山光園、平格納庫南折、地形図の654から悪路（歩くがよい）、この分岐東へ、林道は実際は300m手前で消える。四駆サーフは終点広場、670m、49.7”、36.7”　駐車。南東へ、流れた林道を200m、数分で710m、48.5”、40.8”（図の700等高線谷の先端点）。ゆるい杉の谷30m差、8分、北東へ上がり、堀切のある鞍部630m、山城の雰囲気。

真北へゆるくヤブなしの混合林、広尾根、楽々13分、柿色のあの標識、戦国の山城、湯山城址が見えた。30分足らずの楽勝。杉ノ倒木、細長い台地、なんの感慨もない。城跡はこんなものだ。次は、千年杉見学、戸次の800年楠といい勝負だ。近くの湯山貯水槽駐車。西奥の茶畑あたりがキリシタン奴留湯氏の殿屋敷跡らしい。安部特製のフランスパンのハンバーグ、2人立ち食い、昼食。図の恐ろしい湯山の東谷は高度600mで道がなかった。

次は、高速道手前、乙丸牧場林道西へ上がり、無線塔と牧場ゲートあり、駐車。川北　847.3　三等は工事で消えた。西へ863の藤ヶ城の丘がみえる。牧場草地、周りの山、素晴らしい風景。25分。大友方の5人衆、荒木氏の山城、いまは禿げ山。東芝がH20、モミジなど植林、公園化すれば素晴らしい。

（　参考　　古国府歴史研究会　「　豊後大友氏400年の風景　」私は立花宗茂NHK大河ドラマ化実現の大友顕彰会の会員です。この三角点なしの２山のデータは梅木秀徳氏の一覧からいただきました。）

1：25,000地形図　日出生台・湯平

三等三角点・因尾　508.3

安　部　可　人

梅雨の晴れ間のヤブ山行きをひとつ。楯ヶ城トンネル南口くだり、東折上がる。木材切り出し、休みでよかった。２度下見のこの林道、３４０で南折、４００m先大戸造林とある三叉路駐車、１１：１０。右へすこし下り、平坦５００m、１０分で地図の３７０終点（まだ続く）から、北西尾根の急登１２０m高度差、一度林道に出て、右の低い法面にとりつく（ロープ使用）。軽やぶの二次林４０分で４９０ピーク着。

あとで久保君の歩く５０８．３直下の鞍部から北へ、５３９、二等の楯ヶ城山６０９．５（南下に林道）、目前のその美しい稜線の眺望はここだけだ。ネット沿い、あるきやすい西側の樹林の中、南東へ国土省のせまい切り小径（なければ大変 ）、２０分。広い鞍部は何処からきたのか最近の間伐の跡。ここから唯一の快適二次林の５００台地、５分。因尾５０８．３着、石だけある。１：００久保君と別れて、大失敗。明確に言えばよかった。

５０７北下、楯の旧道峠で待つの約束。かれは速すぎて２：４０着。３時と判断の安部車が遅れた。待ちきれず、かれは湧水のあるトンネル北口に降下、３：００。４：５０かれは急坂を峠へ引き返し合流。小雨の夕暮れ、２時間の無駄な心配。まあいいか。５０８．３はかれのおかげ、感謝。

「佩楯山」は一等、二等、それに三等三角点が１０地点、三等はあと東台３９６．１が残っているが、これはひとりで行ける。

参加者　久保洋一

（Ｈ２３．６．２５）

３．トピック

「３４年のあゆみ」（No2）

西　　孝　子

20 周年記念の大目玉は講師に今西錦司博士と前日本山岳会長と筑波大学教授川喜田二郎博士の講演会（11 月 9 日）で大分芸術会館の会場は満員であった。立見席で私は話を聞きました。内容は「私の山と学問との関係」と山岳地の活性化であった。映画はエベレスト（チョモランマ）（中国）or サガルマータ（ネパール）の記録。本年 50 周年では 100 名そこそこの観客であった。さすがに講師 2 名のネームバリューはたいしたものであった。

私の事務局としての大仕事が終わりほっとした。月 1 回の登山や忘年会、総会を繰り返し仕事もなく 10 年過ぎたような気がする。支部長は野口秋人氏で本部の連絡、会合を必ず私に連絡していた。支部長はバセドー氏病の研究で国より表彰され、秋の園遊会の案内をうけたが出席しなかった。支部長として病気になるまで欠かさず会の行事に参加していた。この時、忘れていけないのは木本喜重（別府の住人）で 2 人はいつも山行に出席していた。

1980 年 5 月 1 日に記念誌は発行しているが、この時の会員数は 45、会友 8 である。宮崎支部の 7 人はうちの支部の会員であった。

大分百山を決める話が出て、それぞれが自分の好きな所へ登ってみて市町村に一山は必ず入れる。この意味は活性化になるのではないかと思った。高い山から百決めるのではなく、低い山でも町に 1 個しかないときは登山ということで考えると大きい山の順に百山決定するほうがいいような気がする。

個人で日曜に登山を計画する人やグループで計画するため月 1 回の山行も 2 人しか行かないときもあり、これでいいのだろうか、と思ったが

山登りは遊びであり、各人が登りたい所へ元気に歩けばいいのだと考えることにした。忘年会の次の日は山行にする。このときは人数が非常に多い。30 人以上になる。重広会員が 4000 山で参加するようになってからは（忘年会のとき）集まる人が多くなった。本部より有名な会員が支部に来ていただけるようになったら、もっと登山も活性化するのではないかと思う。

『登山計画書（前号の続き）』

安　東　桂　三（9193）

個人的に北アルプスに出かけるとき、あるいは、厳冬期の雪山や、ゴールデンウィークに、山に出かけるときは、サニースポーツへ登山計画書を持っていき、西孝子さん（前事務局）に渡し、山に行ってくるよと伝えていた。山から帰ったら、また、西さんにその山行の写真を見せ、報告していた。すると、いつも西さんは『登山計画書を持ってくるのは、星子さんと桂三だけ』と言っていました。

今回、事務局が、飯田さんに替わり、登山計画書をどのように提出しようか？、あるいは、私の家から加藤支部長宅が近いから、直接持って行こうか？と思案していた。

9 月 15 日に、支部長宅に伺い、口頭で山行計画（槍ヶ岳行　2011.9.16～19）を説明すると、飯田さんにメールで送っておくようにとの指示があった。支部長も、9 月 16 日夜から出かける剣岳山行計画を飯田さんに、メールで送っておいたと言った。

そこで、早速、飯田さん宛てに、メールで計画を送信し、槍ヶ岳から帰宅してからは、下山報告をメール送信した。私は、事故が起こるとは考えてないが、ＪＡＣの会員である以上は、計画の提出、山行の終了の報告は、常識と思う。

子供が、母親に『〇〇ちゃんと、〇〇公園へ行って来るよ』、帰宅したら『ただいま』と言うのは、常識で、もし、帰って来なかったら、母親は、必死に〇〇公園を探しまわるのだから。もし、子供が、何も言わずに、いなくなれば、探しようがないし、すべてを探さなければならないのだから。

『3.11 と福島原発、山岳遭難』　日本山岳会東九州支部　安東桂三（9193）

2011 年 3 月 11 日、午後 2 時 46 分、M9.0 の大地震が起こった。その後の、巨大津波、それに続く原発事故について、私は『山の遭難と同じだ』と思った。地震が起こった後、福島原発はマニュアル通り、緊急停止した。原子炉は、緊急停止したら、冷却しなければならない。冷却のためには電源が必要。自家発電（ディーゼル発電機）を稼働させた。が、数十分後に津波がきて、発電機が水没してしまった。電気を送ることが出来ない。

そこで、電源車を持って来て電線をつないだ。復旧しかかったら、次に、電源車の燃料が無くなった。そのため、冷却が出来ず、燃料棒のメルトダウン、水素爆発となった。（私は原子力の専門家ではないが、簡単には今述べた事だと思う）

大地震後の原発の動きは、次から次へと対策をしたが、すべて、うまく機能しなかった。あたかも、手に汲んだ飲み水が、指の間から、洩れて、飲めないような状態。山の遭難も、同じように、いくつもの対策をしても、どうしようもない時に、起こってしまう。

山の遭難事故は、昔、冬山での雪崩、クライミング中の滑落・転落が多かった。が、現在では、

道迷いが一番多い。あとは、滑落、転落、など。その滑落、転落も、道迷いに起因するものが、多い。道に迷って、その結果、転落とかしてしまう。そのメカニズムを、簡単に書いてみると、次のようになると思う。

登山道を歩いていると、分かれ道があった。本来は、右の尾根方向へ歩かねばならないのだが、間違って、左の道へ進んでしまった。その道は、実は獣道だった。引き返せばよいものを、進み、崖に出てしまった。そこで、小さな木の根や、蔓にぶら下がりながら、下った、すると、蔓が切れて、落ちてしまい怪我をしてしまった。尚も進むと暗くなってしまった。ヘッドランプがあれば良いが、持ってないので、暗闇を月明かりで歩いたら、また、つまずいて怪我をしてしまった。もう、どうすることも出来ず、そこに、泊まろうとしたが、防寒具もなく、ツエルトもなく、大変な状況となってしまった。まるで、その状態を原発の事故と同じと思ったのである。

まず、道間違いは、引き返せばよい。国土地理院の 1/25000 図を持っておけばよい。磁石を持っていればよい。日頃、道標や、テープのみを頼りに歩いていたら、そこの間違いを復旧出来ない。また、人のお尻について、受動的な登山しかしてない人も、そこの間違いを復旧出来ない。

次に崖が出てきても、蔓にぶら下がることなく、自分のザックからロープを出して、セットして懸垂下降すれば、怪我をすることはない。暗くなったら、ザックの中から、ヘッドランプを出して歩けば、つまずくこともない。そして最終的に、ザックの中の防寒具を着て、ツエルトをかぶり、非常食を食べて、一晩過ごせば、大変なことになったが、下山遅れと言うことで、終了してしまう。

それでも、もし、留守宅（山岳会の事務局など）が下山しないのを心配し、捜索依頼をすれば、新聞記事として紙面をにぎわしてしまうことになる。

登山計画書（登山届）には、１日は持ちこたえる装備食料があると記載し、実際のメンバーがしっかりしていれば、留守を守る人も、心配はするが、世間をにぎわす行動を取らないかもしれない。

大変な遭難事故を止める手段は、いくつもあるが、上記のように、事故になるときは、あたかも、指の間から水が洩れるように、すべての対策が出来ない。非常用の装備・食料は、非常でなく、常用に携行しなければならない。まずは、そこらあたりの事を、日本山岳会東九州支部会員・支部友で再チェックしてみてはいかがだろう。

『常用装備の一つ　ヘッドランプ』

常用に携行する装備については、いくつかの山岳情報誌や技術書を参考にし、自分の山行スタイルとその目的によって決めるとよいが、私の常用装備の一つであるヘッドランプについて一文書こうと思う。

この頃は、ＬＥＤの発明と共に、ヘッドランプは進化してきた。より軽く、より長時間点灯し、壊れにくい。写真を掲載するが、一番左は、Ｎ社製の白熱球のヘッドランプ（昔のタイプ）、次は、中国製の格安ＬＥＤランプ、その次は、またＰ社製の昼光色ＬＥＤランプ。

昔は、白熱球ヘッドランプでも、登山をしてきた。冬には、早朝出発時に新しい乾電池を入れ、夜明けまでの数時間、それで歩いた。マンガン電池では、4 時間位点灯し、アルカリ電池でもう少し長く点灯した。だんだん、光が暗くなってきたら、電池交換の時期であった。予備電池も常用装備だった。

ＬＥＤランプは、50 時間とか、100 時間とか、150 時間点灯する。電池の交換をすることが少ない。電池が減っても、光量は減少しない。が、欠点は、突然、消灯すること。電池が減ってくると、突然、消灯してしまう。もし、急に、真っ暗になったら、暗闇では、電池交換は不可能に近い。もし、パートナーがいたら、照らしてくれるが、いなければ難しい。そこで、私は、ＬＥＤヘッドランプは、常に 2 個持つことにしている。一つが消灯してしまったら、すぐに、次を点灯させる。ＬＥＤは軽く、2 個持っても、負担にならない。そこで、写真に載っている 2 個のＬＥＤランプは、ザックの中の常用装備となっている。

今回、9/16 から 9/19 で槍ヶ岳に行ったが、別の意味で、ＬＥＤランプは、2 個とも使用した。4 人パーティだったが、一人がそれを忘れたので、それを使用してもらった。

また、9/17 に槍ヶ岳に登ったが、台風の影響で、雨。台風は遠く太平洋にあったが、台風が、前線へ湿った大気を送り込んだため、日本海にある前線は、活発。それで雨であった。

年配の 2 人とロープに繋がり、ショートロープ法で登る。下りは、もう一人、ロープにつなげて、ハシゴや鎖を下りた。『しっかりハシゴを持て』の声より、ロープにつながった方が、ＢＥＳＴ。私にとって、ロープも常用装備。

◆味わい登山◆

久　保　洋　一

「たまに」の登山がいい。気分が一新するではないか。

出発前の準備も、どこかしら、わくわくする感じが、またいいものだ。

日常からつかの間でも離れられることへの期待感が気分を高揚させる。

地図は入れたかな、コンパスは、と所持品のチェックにも気分がはずむじゃないか。

すっかり準備が整うと、どっかと腰をおろし、畳みの上に地図を開く。

登山口に到るまでのアプローチと登山ルートの確認だ。

まじめに確認しているように見えても意識は時空を超えて地図の中で遊んでしまう。

澄み切った空、心地よい風、すばらしい眺めに楽しい会話。

そしてひと汗かいたあとの山頂での食事のひと時。

これらに、思いを馳せている。

こうした一連の心地よさは、お仕着せの山登りではとても望めないだろう。

このとき登る山だけど、それはいつもの山でもいいし、初めての山でもいい。

だけど、チャレンジするような山では緊張が伴う

だろう。

やはり、味わい登山は、創作メニューではなく、普段のメニューに間欠のスパイスがいっそう味をひきたてるようだ。

ペンリレー　第五回

剣　雑　感

興田勝幸

9 月 22 日夕刻、昨年、願いがかなわなかった南アルプス登山へと日出町の｜氏宅に向かう。到着するや否や｜氏が首都圏を襲った台風 15 号の影響で、南アルプスの荒川三山や赤石岳の登山口の椹島～畑薙ダム間の道路が崩壊して、車の通行に支障があるとの事を告げられる。昨年も雨に祟られて、途中より方向転換して鳥海山へ、では今回は何処にするかをメンバー4 人で協議、若い２人の希望で剣岳登山に決める。夕刻、7 時日出町を出て高速道路を一路富山へ。23 日朝、8 時過ぎのケーブルカーで美女平、バスに乗り換え称名の滝～弥陀ケ原～室堂と行く。今夜の宿探しとして、剣沢小屋、剣山荘、剣御前小屋に宿泊希望を伝えるもいずれも満室と断られ、剣岳とは少々距離があるが空き部屋のあった雷鳥荘に宿を決める。

この雷鳥荘は 40 数年前、私の北アルプスデビューの山荘で、感慨深いもの感じた。本日の行動予定では剣岳近くまで登る予定であったが、雷鳥荘になったので時間に余裕が出来、奥大日岳に登る事に…。山頂近くで今の時期では珍しい雪降りに会う。瞬く間に一面白くなる。ナナカマドの赤い実が印象的であった。24 日、剣岳を目指して 7 時、雷鳥荘を発つ。何度となく登った雷鳥坂の上り、予定通りの時間で昨日予約した剣山荘に到着。

情報では剣岳山頂近くのカニの縦這でかなりの時間待ちとの事、今夜は剣山荘泊まりなのでゆっくり行くかと剣山荘を発つ。ゆっくり行ったのが効をそうして縦這い、横這いと全く、渋滞する事なく通過出来た。

山頂からの展望は快晴のおかげで槍、穂高岳そうして富士山も…。新人２人は緊張した様子であったが達成感に浸っていた。高価だが夕食の乾杯ビールは旨かった。飲めない私とて…。25 日、剣御前小屋よりより真砂岳～立山三山～室堂。雄山山頂では神官に安全登山をご祈祷していただく。

今夜の宿はの話しの最中、息子からの電話。仕事が忙しくどうにもならん、早く帰って欲しいとの事。メンバーに無理を言ってそのまま帰る事に…。26 日朝 7 時、杵築着。密度の濃い 4 泊 5 日の登山となった。以上が秋分の日を挟んだ三連休の登山報告です。少々懐古趣味になり恐縮ですが…。

私の北アルプスデビューは前にも記しましたが雷鳥荘をベースにした立山です。昭和 40 年の 4 月～5 月のゴールデンウィークでした。特急列車で 1 日かけて大阪へ、それより夜行列車で富山へ。その頃は毎年のように私鉄がストライキを連休にぶっつけていて、まともに雷鳥荘や雷鳥平のキャンプ場に着いた事がなかった。記憶に残るのはケーブルカーで簡単に上る、美女平までの急坂を重いザックを背負って登った事は少々きつかったが、懐かしい思い出である。剣岳へは 30 歳前後毎年のように通った。剣沢に登山研修所の前進基地があり、それを活用して主に岩登りに励んだ。八ツ峰 6 峰の各フエス、剣尾根のドーム稜、最後の年に三の窓チンネの左稜線を登った。

今回の剣岳登山は昭和 55 年 4 月の早月尾根から以来で実に 30 数年ぶりに…。体力はまあまあとしても、下りに於いては確実にバランス力は落ちている。ぽんぽんと行けた所がややもすると、恐る恐るです。もう歳なんですよの警告として大

いに自覚した次第です。「今、出来る事に全力を尽くす」これからも続けて行くであろう山登り。全身全霊をもって、その時にしか出来ない事に取り組んで行きたい。少しでも後悔を少なくするために。40 数年の山登りの総括それは『山に感謝！仲間に感謝！』です。

４．インフォメーション

視覚障害者支援登山大会

今年度支部の公益事業の一つである、『視覚障害者支援登山大会』は次のとおり実施されることとなりました。今年度始めて、本格的に加わることになった事業です。会員・会友の多数の参加をお願い致します。支援方法等の注意事項等は当日説明しますので、経験のない方も積極的にご参加ください。

なお、参加できる方は 10 月 30 日までに事務局（飯田・0977-21-3437、090-2503-8409）へご連絡ください。

１．日　　時　11 月 6 日（日）
２．集合場所　霊山寺駐車場
３．集合時刻　午前９時まで
４．予定次第
　オリエンテーション：午前 9 時 30 分から
　支援登山：霊山寺から霊山山頂往復
　終了予定時刻：午後 2 時ごろ

忘年登山と忘年会のご案内

毎年恒例の登山家重廣恒夫氏（関西支部長）を迎えての、忘年登山と忘年会を次の日程で予定しています。参加希望者はあらかじめ予定を空けておいて、参加申し込みを 11 月 10 日までに事務局まで行って下さい。参加申し込みした支部員のみに、後日詳しい日程等をお知らせします。

月　日　　12 月 10 日（土）・11 日（日）
登る山　　10 日・中摩外畑山
（予定）　　11 日・樋桶山、檜原山
忘年会場及び宿泊場所
　〒871-0713
　大分県中津市山国町藤野木 12?1
　「やすらぎの郷山国」
　　0979-62-2186
参加申し込み
　申 込 先　　事 務 局 ・ 飯 田
（0977-21-34237・090-2503-8409）
　申込期限　11 月 10 日まで
　申し込み方法
　① 2 日間全日程参加、
　② 忘年会と二日目参加、
　③ 忘年会のみ参加、
　④ 一日目の山行のみ参加
　⑤ 二日目の山のみ参加、の区分を明確にして下さい。

お知らせ

五〇周年記念誌の頒布

五〇周年記念誌の残部がありますので頒布します。みなさん是非購入のうえ、友人や同好者に贈ってあげて下さい。

一部…１，０００円

（但し、記念誌原稿執筆者に限り一部…５００円とします）

希望者は事務局（飯田勝之・0977-21-3437・090-2503-8409）　まで

大分百山手ぬぐいの頒布

第１０回青少年体験登山大会の参加記念品として特別に作成した「大分百山手ぬぐい」。希望者に頒布できるよう余分に作成しています。きっと貴重な品物となるとおもいます。ご希望の方には頒布しますので申し出てください。

頒布価格

会員・会友　　１枚　300 円

一般　　１枚　500 円

申込先　　事務局

（飯 田 勝 之・ 0977-21-3737

・090-2503-8409）

平成 23 年度　年間　月例山行予定　　および実施状況

月	日	山　　名	リーダー	予定費用	参加人数	コメント
5	21	**天草**　白岳(372.8m)、倉岳(682.2m) 次郎丸岳(397.1m)・他	加藤英彦	5,000 円	6 名	茅野亨生さんにお会いする。
6	26	**屋形島**　屋形(198.7m) **深島**　深島(98.0m)、南深島(79.8m)	飯田勝之	4,000 円	8 名	台風で島に渡れず。蒲江港近くの山へ。
7	29 ～ 31	**対馬**・上島　御嶽(479m) **対馬・下島**　洲藻白嶽（519m）、矢立山（648.5m） 有明山（558.2m）、竜良山（558.5m）	飯田勝之	30,000 円 (5 名参加の場合)	7 名	夏の島の山は蒸し暑い。
8	14	**姫島**　矢筈岳（266.6m）、達磨山（105m）	中野 稔	3000 円	12 名	狐踊りが主。
9	24	**大入島**　久保浦(193.7m)、高松(173.9m) **八島**　八島（98.0m）	飯田勝之	3,500 円	12 名	台風で島に渡れず。
10	8 ～ 9	**福江島**　鬼岳(315m)、箕岳(144m)、七ツ岳(432m) 父ケ岳(460.8m) **上五島**　御嶽(439.2m)、雄岳(401.5m)	加藤英彦	20,000 円 (5 名参加の場合)	4 名	上陸したら箱庭だった。うちわえびを味わった。
11		**屋久島**　宮之浦岳(1936m)、永田岳(1886m)	佐藤秀二			合宿登山
12		**保戸島**　遠見山(178.6m)　**黒島**　南黒島(84.5m) **沖無垢島**　沖無垢島(142.4m)	飯田勝之			
1		**蔦島**　羅洲(64.4m)　**黒島**　北黒島(27.2m) **津久見島**　津久見島(166.2m)				
2		**奄美大島**　湯湾岳(694.4m)、南郷山(307.7m) ヤクガチョボシ岳(440.6m)				雨の多い島
3		**大島**　大島(193.3m)、船隠(130.9m) **高手島**　高手島(30.2m)　**横島**　横島(138.4m)				
4		**平戸島**　志々伎山(347m)				平戸大橋にて

編集後記

感想　中野編集初体験。パソコン操作に手間取って悪戦苦闘中、悪しからず。

読者の声　会報に関するご意見・記事や原稿などは次のメールアドレスへお送りください。

yariho1953@yahoo.co.jp

2011 年 10 月 25 日　発行
東九州支部　支部報 55 号
発行者　加藤　英彦
編集者　久保洋一・中野稔
発行所　事務局　〒874-0820
別府市原町 5-14 飯田勝之方
Tel・Fax　0977-21-3437